福井、養浩館と丸岡、千古の家庭園の三尊石組について

Stone arrangements of Sanzon-Iwagumi at
the Yokokan Garden in Fukui and at the
Senkonoie Garden in Maruoka

堀澤眞澄

Masumi Horizawa

舞鶴市文化財保護委員長

Key Words

1. 三尊石組

2. 山田宗偏

3. 江戸初期

Stone arrangement Sohen Yamada The early
of Sanzon-Iwagumi Edo era

摘要

養浩館と千古の家庭園は、山田宗偏がその作庭に関与していると考え、両庭の三尊石組についても、同様に江戸時代初期元禄、宝永の頃に宗偏が石組を作ったのではないかと推定する。

はじめに

演者は、平成16年度日本庭園学会研究大会に於て「福井養浩館、丸岡千古の家庭園と茶道流祖、山田宗偏との関係、並びにその作庭手法について」発表し江戸時代初期元禄宝永の頃に山田宗偏が作庭に関与しているだろうと述べたが、今回は両庭園(写真①②)に現存する三尊石組に就いて研究した。

両庭の三尊石組の形態と手法

元来、日本庭園の色々な石組の中で、最も代表的な石組は三尊石組である。

養浩館庭園の三尊石組は、養浩館案内書や日本庭園史大系等の文献にその存在が全く記されていないが、平成7年9月、京都林泉協会がこの庭園を訪れた時、丁度、池の水が乾されていたので、佐藤昭夫は池側から「臼ノ御茶屋跡」の近くの護岸石組の中に三尊石を発見して撮影し(写真③)江戸時代は、舟遊の時に築山(蓬莱山)、岩島や陰陽石などと共に三尊石組も眺めることが

出来たのではないかと云っている。一方、千古の家庭園は、大名や寺院に遠慮したかのような簡素な庭であるが、蓬莱石、陰陽石や枯滝石組兼用の三尊石組(写真④)が存在することは、既に演者が発表している。両庭園の三尊石組は三尊佛を表現するが如くに共に台座石を有し、これらの石の組み方は、山田宗偏作庭と伝へられる静岡県大福寺(写真⑤)や宗偏が手本としたと云われる静岡県摩訶耶寺(写真⑥)庭園の三尊石組に似ていて、尚且つ滋賀県浅井町名勝庭園、大吉寺の景石三尊石組(写真⑦)にも相似している。重森三玲、完途は日本庭園史大系(23)(34)に於て大吉寺庭園は、元禄時代を前後するものであると断定、指摘している。重森完途によれば、三尊石組は、年代によってその平面配置の手法が異なっていて、江戸時代初期(因みに貞享、元禄から宝永、正徳迄は江戸初期の後葉になる)では、平面は二等辺三角形に近いが、脇侍の2尊が中尊に接近しているため、三角面に於いては整然とした形となっている。(図⑧⑨⑩)(大吉寺三尊石組と両庭の三尊石組は、共にこのような配石になっている。)しかし、正面、立面の意匠は、桃山時代(写真⑧図⑪)と大差がないと述べている。千古の家

庭園の三尊石組は、「いろり」のある「おえ(台所)」や斎藤忠一の指摘する四阿跡(東屋)の方を向いており、建築学者日向進の説によれば「いろり」のあるこの部屋は、昔は客室を兼ねていたと云ふ。「おえ」の北東側に庭に出ることが出来る大きな引き戸があり、ここから飛石が四阿跡に向けて打ってある。昔は軒下まで雪が積もるこの上竹田の地方では、庭に面した東側は腰高障子や引き戸はあるが他に開口部はない。雪のない時は、おえの引き戸をあければ庭を眺めることが出来て、来客や家人もここから三尊石や蓬莱石を拝むことが出来るが、雪の季節には、家の側面全体を板で囲うこの地方では、坪川貞彦は、家の中から庭を眺める風習は昔はなかったのではないかと云っており、庭を鑑賞するために四阿が建てられたと考えている。平安時代の古い作庭の指南書である「作庭記」は、その立石口伝の中で、三尊佛の中尊の立石は、西南の方を向き、寝殿(この家ではなんど)へ向けて立石してはならないと述べているが実際に、この口伝の通りになっている。明治 11 年に「なんど」の北側に部屋を作ったり、庇や縁側を増築し、庭が家から見易くなったので、この時に作庭したのではないかとの説もあるが、之に関する当時の記録や文献はない。(屋敷は復原されて増築部分は撤去されている。)又明治初年には、明治維新や廃藩置県などで世相は混乱し、多くの邸宅内にあった庭園の殆どは潰滅したり荒廃した。江戸末期からだんだん三尊石組は、三尊としての意識がうすれて、自由の精神を失った日本の庭は、幕末に於て史上最低の状態であったと久恒秀治は云っており、日本古来の神道、佛教、道教の思想を表現した石組の芸術的な技術はすたれて、明治時代以後は、石を組むことよりも、捨石か景石を庭に入れ、借景式自然主義的庭園が多くなった。小川治兵衛は、明

治 25 年から昭和 8 年迄、京都を中心として全国に大庭園を作ったが、彼の作庭した庭園には景石はあるが、三尊石組はない。

おわりに

養浩館と千古の家坪川庭園の三尊石組は、江戸末期や明治、大正、昭和ではなく、江戸時代初期、元禄・宝永の頃に作られたものであり、山田宗偏がこの石組を作ったのではないかと推定する。

参考文献

- 重森三玲、完途. 日本庭園史大系; 社会思想社 1971
- 佐藤昭夫、林泉 622 号; 京都林泉協会 2005
- 斎藤忠一、千古家坪川邸庭園について 2000
- 重森完途、日本庭園の手法; 毎日新聞社 1977
- 重要文化財坪川家住宅修理委員会、重要文化財坪川家住宅修理報告書 1969
- 久恒秀治、作庭記秘抄; 誠文堂 1979
- 尼崎博正、植治の庭; 淡交社 1990
- 坪川貞彦、「坪川家住宅修理報告書及斎藤氏記坪川邸庭園について」を読んで 2005
- 堀澤眞澄、源三位頼政末裔、坪川家古庭園補遺; 京都保険医新聞 2001
- 堀澤眞澄、舞鶴の古庭園、田辺城跡心種園 1991
- 長谷川正海、日本庭園要説; 白川書院 1977

写真①

写真②

写真③

(佐藤昭夫撮影)

写真④

写真⑤

写真⑥

写真⑦

図⑧ (日本庭園史大系より)
大吉寺、景石三尊石正面図、平面図

養浩館護岸三尊石

養浩館三尊石平面図、正面図

図⑨

坪川千古家庭園三尊石

坪川庭三尊石平面図、正面図

図⑩

中島三尊石組正面図

中島三尊石組平面配置図

写真⑧

心種園、桃山時代三尊石平面図、正面図

図⑪